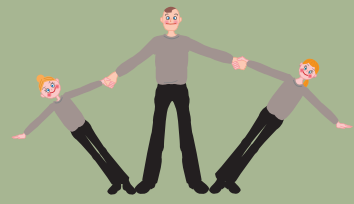


運動疫学 ニュースレター



平成 26 年 7 月 10 日発行 No. 3

第 17 回日本運動疫学会学術総会のご案内

日本運動疫学会学術委員、防衛大学校体育学教育室 安藤 大輔

第 17 回目の学術総会は日本運動疫学会としての最初の総会になります。今回の学術総会のテーマは「運動および身体活動と健康に関連する研究のさらなる発展」とし、学会化記念としてこのテーマを掲げたシンポジウムを企画しました。

また、基調講演では熊谷秋三先生(九州大学)より「運動疫学研究の成果と課題および今後の展望」というテーマでご講演いただきます。

さらに、教育講演では日本疫学会でもご活躍されております田中恵太郎先生(佐賀大学)から「生活習慣病の遺伝子-環境交互作用」に関する情報をご提供いただきます。一般発表では、昨年と同様に 3 タイプの発表形式を設定し、多くの会員の皆様のご発表をお待ちしております。

1. テーマ：運動および身体活動と健康に関連する研究のさらなる発展
2. 日 時：2014 年 9 月 18 日 (木) 12:30 ~ 19:00
3. 場 所：長崎大学 文教キャンパス
4. 交 通：JR 長崎駅から路面電車「長崎駅前」→「長崎大学前」下車 長崎空港から県営バス「長崎空港 4 番のりば」→「長大裏門前」下車
5. 参加費：会員 1,000 円・非会員 2,000 円 (当日、受付にて徴収)
6. 共同開催：職域身体活動研究会 (日本産業衛生学会)
7. 協賛企業：株式会社スズケン
8. プログラム：詳細は学会ホームページ (<http://jaee.umin.jp/>) をご確認ください。
9. 一般発表の演題募集：下記の 3 セッションについて募集いたします。

- (1)一般発表
- (2)研究デザインあるいは研究計画の発表



- (3) 2 ~ 3 枚のスライド・1 話題
10. 一般発表の抄録提出メ切：2014 年 8 月 25 日 (月) 抄録の書式および提出方法については、学会ホームページをご参照ください。
11. その他：健康運動指導士、健康運動実践指導者の登録更新に必要な履修単位としての認定申請を予定しています。
12. 事務局：中京大学工学部ヘルスプロモーション研究室 (種田研究室)
E-mail : jaee.meeting@gmail.com

CONTENTS

1. 第 17 回日本運動疫学会学術総会のご案内	1
2. 第 15 回運動疫学運動疫学セミナー開催のお知らせ	2
3. 第 5 回国際身体活動公衆衛生会議 (ICPAPH) 参加報告	2
4. 私と疫学	4
5. 【最近の注目論文】	
Relation of physical activity time to incident disability in community dwelling adults with or at risk of knee arthritis: prospective cohort study (Dunlop DD et al., BMJ 2014;348:g2472)	4

第15回 運動疫学セミナー開催のお知らせ

日程：2014年8月22日(金)13:00
～24日(日)16:00まで(2泊3日)

会場：あいち健康の森 健康科学総合センター (<http://www.ahv.pref.aichi.jp/>)

〒470-2101 愛知県知多郡東浦町大字森岡字源吾山1-1

受講料：一般(有職者) 40,000円
学生 35,000円

定員：全コース合わせて約30名(定員になり次第、締め切ります。)

※セミナー受講者は運動疫学研究会の会員とします(非会員の方は入会をお願いします)

セミナー受講料について：

学生会員であっても専任有職者には学生料金が適応されません。

また宿泊は相部屋となります。

申込み方法：

申込書をダウンロードし(<http://jaee.umin.jp/seminar.html>)、必要事項を記入のうえ、電子メールに添付して運動疫学セミナー事務局(jaee.seminar@gmail.com)に送信ください。

申込締切日：

平成26年7月20日(日) 17:00

問い合わせ先：運動疫学セミナー事務局(jaee.seminar@gmail.com)

講義内容：

セミナーの時間割→ホームページをご参照ください。

(<http://jaee.umin.jp/seminar.html>)

1. コース選択：本セミナーに3コースを設けました。以下のコースから1つお選びください。

○ベーシックコース：疫学的研究デザインを意識して研究計画をつくれるようになる。

○アドバンスコース：疫学的研究の運営・解析・論文化する力を身につける。(※初めてセミナーに参加される方は原則としてベーシックコースをおすすめします。)

○フリーコース：疫学的研究を実施する上で身についた企画・運営・解析・論文化の力を復習する。講義(アドバンス・ベーシック)は自由に選択できます。グループワークはアドバンスコースに参加していただきます。(※原則としてアドバンスコースまでを終了した方とします。)

2. 運動疫学研究に関する合同および個別相談プログラム

(1) 合同相談プログラム(運動疫学研究実習)

アドバンスコースとして2日目の午後に個人研究に関して講師陣全員と討議できる時間を設けます。これから実施する予定の研究、あるいは現在進行中の研究の現状について発表した後、講師陣全員に対して研究に関する相談や質問が可能です。また、他の受講者や講師陣とご自身の研究に関する討議が可能です。このプログラムへの発表希望者は、研究の指導を担当されている方(指導教授や研究班長)がいる場合、本セミナーにおいてこのような企画があることを伝え、承諾を得た上でご参加ください。

(2) 個別相談プログラム

フリーコース(アドバンスコース参加者は要相談)を選択された方の中で、これから実施する予定の研究、あるいは現在進行中の個人研究に関して講師陣と個別に話し合う時間帯も設けます(1人:30～60分、参加希望者数によって変更)。このプログラムへの参加希望者につきましても、研究の指導を担当されている方(指導教授や研究班長)がいる場合、本セミナーにおいてこのような企画があることを伝え、承諾を得た上でご参加ください。

第5回国際身体活動公衆衛生会議(ICPAPH) 参加報告

日本学術振興会特別研究員(PD)・早稲田大学 武田典子

2014年4月8日から11日まで、ブラジルのリオデジャネイロで開催された第5回国際身体活動公衆衛生会議(ICPAPH: International Congress on Physical Activity and Public Health)に参加してきました。ICPAPHは学術雑誌“Journal of Physical Activity and Health”を発行している学会(ISPAH: International Society of Physical Activity and Health)が主催する学術集会であり、2年に1度開催されています。ICPAPHの特徴は、身体活動に

関する幅広いテーマ(健康アウトカム、関連要因、測定評価、政策など)が発表されることです。テーマが「身体活動のエビデンス構築」と「ポピュレーションレベルの身体活動推進」の両方に関係しているため、多くの皆様がICPAPHに興味を持たれるのではないかと思います。今回は年度初めの影響もあり、日本からの参加者は8名となりました。

今回の学会では、前回に引き続きLANCET Physical Activity Seriesの

著者によるシンポジウムが行われ、東京医科大学の井上先生がPA Series発表後の社会的な影

響と今後の課題についてご発表されました。私は主にコホート研究と介入研究を見て回りましたが、座位行動に関しては演題数も多く、注目度の高さが伺えました。また、身体活動環境に着



目した研究も盛んに行われていたように思います。全体として、日本ではまだ行われていない様々なアイデアの発表を見ることができ、大変勉強になりました。

私は、日本人高齢者を対象とした身体活動・座位行動とうつ症状に関する研究で口頭発表を行いました。発表のときは質問がなく少し残念でしたが、セッション後に海外の先生から声をかけていただき、貴重なアドバイスをいただくことができました。この

ように若手にも気さくに話しかけていただけ、暖かい雰囲気を持った学会であると感じました。

世界の研究者が身体不活動の問題を解決するために真剣に取り組んでいる姿を間近で見て、研究を進めるモチベーションにも繋がりました。第6回ICPAPHは2016年11月にタイのバンコクで行われる予定ですので、ぜひ多くの皆様にご参加いただきたいと思います。

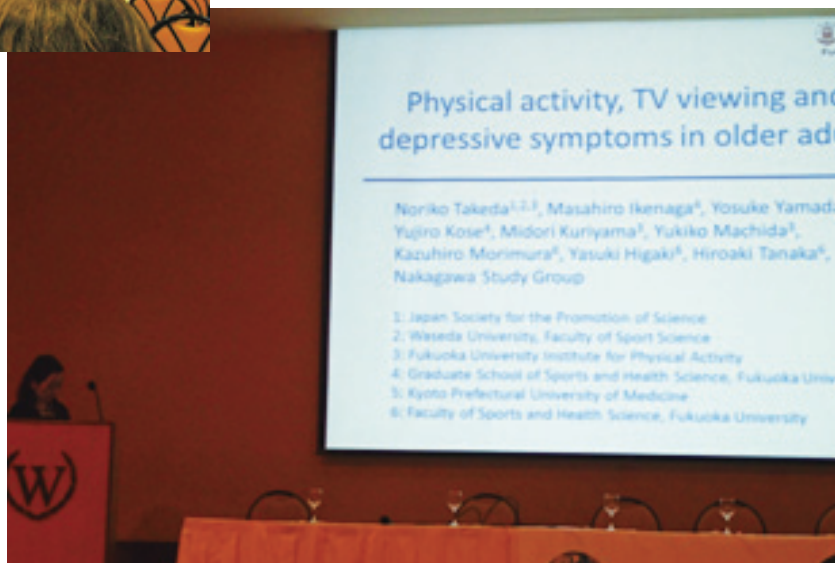
追記：今回の学会では、国際的な身体活動プロモーションネットワークである Agita Mundo (<http://www.portala-gita.org.br/en/agita-mundo>) によるウォーキングイベントも開催されました（写真1枚目）。Agita Mundoの本拠地がサンパウロにあり、ISPAHがその活動をサポートしていることから学会企画として行われたそうです。イベントでは参加者全員にブラジルカラーのTシャツが配られ、皆で海岸沿いを30分間ウォーキングしました。

Agita Mundo による
ウォーキングイベント
(中央：井上先生、右：鎌田先生)



オープニングセレモニー

口頭発表の様子



私と疫学

学術誌「運動疫学研究」編集委員長 東京医科大学公衆衛生学講座 井上 茂

私が初めて本格的な疫学に触れたのは、日本循環器管理研究協議会（現：日本循環器病予防学会、通称：日循協）の疫学セミナー（1996年滋賀）でした。当時の上司、下光輝一教授に参加を勧められ、言われるがまま、何も考えずに申し込んだ記憶があります。当時、私は筋生理の研究を始めていたが、“疫学”にはあまり馴染みがなく、この領域にはやや高い敷居を感じていました。セミナーは5日間の合宿形式でしたが、最初の日には、これは場違いなところに来てしまった、と後悔したことを覚えています。今考えると全くの誤解ですが、疫学者というとな

んとなく論理的、冷静で、融通の利かない面倒な人達というイメージでした。しかし、セミナーが進むにつれて、そのような誤解はだんだんと消えてなくなり、疫学というのがむしろ人情の世界で、熱い情熱を持った人たちが集まって、飽きずに議論を交わす、とても刺激的な世界だと感じるようになりました。寝食を共にすると言いますが、5日間ディスカッションに明け暮れた同期の仲間とは今でも交流が続いています。運動疫学研究会が設立されたのはその2年後ということになります。今度は自分がセミナーの講師を務める側になりました。ここにもまた、熱いま

インドを持った素晴らしい仲間が大勢います。この学会とともに活動してこれたことは、私の研究人生を豊かにするとともに幸運なことであったと感謝しています。小さな学会ではありますが、こうして自身自身の研究生活を振り返ってみると一番大切な学会かもしれません。この素晴らしい風土が残ったまま、さらに発展していくことを望んでいます。



【最近の注目論文】

Relation of physical activity time to incident disability in community dwelling adults with or at risk of knee arthritis: prospective cohort study (Dunlop DD et al., BMJ 2014;348:g2472)

日本運動疫学会広報委員、日本学術振興会海外特別研究員

Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School 鎌田 真光

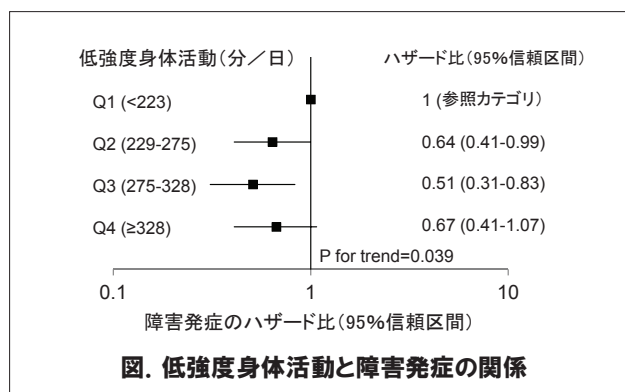
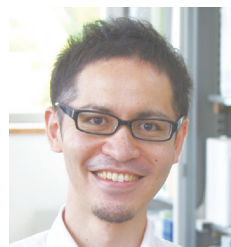
【背景】 これまでの研究成果をもとにした身体活動のガイドラインでは、中高強度（3METs以上）の身体活動が健康増進のために推奨されている。しかし、低強度身体活動の疾病予防効果については明らかになっていない。

【論文概要】 1軸加速度計（Actigraph GT1M）により評価された低強度の身体活動量が2年後の障害（disability）の発症および悪化と関連しているか明らかにすることを目的とした。本研

究は米国 Osteoarthritis Initiative の公開データを用いた前向きコホート研究であり、変形性膝関節症を有するかそのリスクを持つ49 - 83歳の男女が研究対象である（障害発症の検討：1680人、悪化の検討：1814人）。社会人口統計学的変数および健康関連変数に加えて、中高強度の身体活動時間も調整変数に加えて分析した結果、低強度の身体活動時間が長いほど障害の発症（ P for trend=0.039）および悪化（ P

を実施できない中高年者でも、低強度の身体活動時間を長くすることで障害のリスクを下げられるか、今後の検証が望まれる。

【コメント】 加速度計を用いた身体活動に関する大規模疫学研究が各国で動き出しています。今後はこうしたデータをもとに、これまで検証が難しかった問題についても明らかになっていくことが期待されます。



for trend=0.018) のリスクが低いことが分かった。この結果は、低強度の身体活動量が中高強度の身体活動量と独立して障害の発症および悪化のリスクと関連していることを示している。様々な理由で強度の高い身体活動

発行：日本運動疫学会
 日本運動疫学会事務局
 〒466-8666 愛知県名古屋市中区八事本町101-2
 中京大学工学部・ヘルスプロモーション
 (種田) 研究室内
 E-mail: jaee.info@gmail.com